

藺田香融編著 『南紀寺社史料』

(二〇〇八年七月発行、関西大学出版部、A5判、三八四頁、定価八、〇〇〇円(税抜))

竹 中 康 彦

一

本書は、一九八三年から八五年にかけて、文部省(現在の文部科学省)の科学研究費補助金を受けて実施された総合学術調査「紀伊半島の文化史的研究」(研究代表者・横田健二)の宗教班が、「紀伊半島における仏教諸派の伝播」という研究課題で実施した調査成果をまとめ、関西大学東西学術研究所資料集刊二十五として刊行されたものである。

この調査期間中には、①新宮宗応寺文書、②由良興国寺文書、③小川八幡神社蔵大般若経、④和歌山真光寺文書などの調査が行われ、また期間終了後にも、⑤野上八幡宮所蔵御託宣記の調査が関連してなされたということである。そして、本書ではその成果にもとづいて、(一)新宮宗応寺文書、(二)由良興国寺文書、(三)野上八幡宮所蔵御託宣記などを復刻し、あわせて(四)小川八幡神社所蔵大般若経調査の結果を収録し、さらに(五)解説で収録された史料の概要を紹介し、いくつかの論点に検討を加えるという構成になっている。

二

本書の構成および収録史料は、次の通りである。

口絵・序・凡例

新宮宗応寺文書

- 一、新宮宗応寺支配下末寺帳(寛政十二年・一冊)
 - 二、熊野曹洞宗寺院本末帳(年代不詳・一冊)
 - 三、本末末相極内支配下より一札留(寛文五年・四冊)
 - 四、末寺より当寺へ入末一札留(寛文十一〜元禄九年・二冊)
 - 五、諸寺院へ入末一札留(寛文十一〜延享三年・一冊)
 - 六、諸末寺より指上申書札等留(寛文十二〜正徳三年・一冊)
 - 七、境内田畑改につき諸末寺より覚留(延享四年・一冊)
 - 八、宗応寺堂宇再建願書等控(元禄七〜文化六年・一冊)
- 由良興国寺文書

一、興国禅寺諸末刹牒(元禄七年・一冊)

二、寛政十二年那智山奥之院一件書類(享和元年・四冊)

御託宣記 野上八幡宮所蔵（至徳元年・三卷）

小川八幡神社所蔵大般若経（調査報告）

一、大般若経法量一覽

二、大般若経銘文集

三、大般若経経箱書集成

付一、小川八幡宮祭祀之記（享保十九年・一卷）

付二、小川旧庄中覚書（大正三年・一冊）

解説

一、序論―紀伊半島における仏教諸派の伝播（藺田香融）

二、新宮宗応寺文書と紀南曹洞宗（藺田香融）

三、近世における紀伊国由良興国寺末寺と那智山（原田正俊）

四、野上八幡宮所蔵『御託宣記』について（櫻木潤）

五、小川八幡神社所蔵大般若経について（藺田香融）

あとがき

冒頭に述べたように、本書の性格は基本的に史料集であるが、それぞれの史料群の概要と基本的な視角については、解説のところで述べられているため、この書評においては、解説の部分を中心として概観することにした。

三

「序論」（藺田香融）においては、この研究課題の設定を明らかにするための解説がなされている。まず、紀ノ川・櫛田川以南の地域（和

歌山県全域と三重県の南部、および奈良県の一部）を紀伊半島の範囲とし、その中での仏教各宗派の現状分布とその特色、そして宗派伝播の歴史的経過を概観している。そして、その中で浮かび上がった問題点に関連して、それぞれの調査の概要が記されている。すなわち、（1）東西南北四牟婁郡地域において非常に顕著な曹洞宗の分布状況を説明するための新宮宗応寺文書、（2）東西牟婁郡と伊勢・度会郡に多く分布する妙心寺（法燈）派寺院の発展過程を明らかにするための由良興国寺文書、（3）高野山寺領荘園における村落宗教生活の実態を浮かび上がらせるための小川八幡神社蔵大般若経、（4）法燈派の神祇観を物語る野上八幡神社御託宣記、そして（5）浄土真宗本願寺派の展開をあらわす和歌山真光寺文書という調査の視角が示されるのである。これは、象徴的な文書群の分析により、歴史的な状況を解明しようという方法論であろうが、その中でもかなり特定の史料に限定しているという印象である。なお、真光寺文書については、今後の追加報告に期待したい。

「新宮宗応寺文書と紀南曹洞宗」（藺田香融）では、本書で復刻された八件の資料をもとに、紀南地域で一五〜一六世紀に急速に発展していった曹洞宗について、本末関係をを用いて明らかにしようとしている。とくに表1はそれを図示した労作であり、曹洞宗布教の全国展開の様相を見て取ることができる。なお、本書でも記されているように、宗応寺にはほかにも多くの古文書が残されているので、今後の調査研究が必要であることは同感である。さらに、本論中でも一部引用されている「宗応寺由緒書上」や、ほぼ同時期の「宗応寺由緒書」（和歌山県立博物館編『熊野速玉大社の名宝―新宮の歴史ととも

に―」、二〇〇五年、展示番号171―1)によると、宗応寺は古くは崗輪寺とよばれ、熊野速玉大社の神宮寺であったということなので、本論で「伝播の要因については、熊野三山に関係する神祇信仰や修験道に注意しておきたい」としていることも含めて、熊野信仰の全国的な拡大に付随する人・モノの往来や交通状況などにも視野を拡大して検討することが必要であり、この点は次項の法燈派の拡張に関する分析手法もある程度応用できるのではなからうか。

「近世における紀伊国由良興国寺末寺と那智山」(原田正俊)は、近世の興国寺末寺帳と那智山奥之院一件書類の分析により、興国寺の末寺の展開と那智山への信仰との関係を中心に述べる。末寺帳の分析では、紀伊半島における興国寺の法燈派の末寺分布は、地図1で図示されているように、熊野三山と伊勢信仰、熊野参詣道への関係性がきわめて顕著である。在来の信仰を利用して、法燈派が在地に食い込んでゆく様相は、きわめて興味深い。那智山奥之院一件書類は、興国寺中興の無本覚心が創建した末寺・那智山奥之院が、近世半ばの訴訟において那智山から独立した禅宗寺院であることを主張したものであり、さらにそこから那智山で行われる施餓鬼は、無本覚心と関係の深い熊野比丘尼の観心十界曼荼羅の絵解きにおいても語られることを指摘している。無本覚心の縁起の中で、覚心と熊野権現が交流するということや、那智山内の葬送を奥之院の禅僧が担当したことなど、この地域の信仰の重層性を明らかにしている。

「野上八幡宮所蔵『御託宣記』について」(櫻木潤)は、「御託宣記」に収録された「野上庄託宣事件」(建治四年(一二七八)に野上庄の二人の女子に八万神が憑依し、無本覚心と問答を繰り返したという

きごと)などについて詳しく紹介するとともに、『御託宣記』三巻のうち、上巻の末尾には紙筆檀那として、中巻の末尾には覚心とともに憑依した八幡神との問答を聞いた者として、多くの人名がみられるが、野上庄内だけでなく且来庄・山東庄や伊都郡、興国寺などに関係する人物が含まれており、興国寺との関係とともに、野上八幡宮への信仰の広がりを表すものとしている。また至徳元年(一三八四)の奥書を記した書写僧の呑空は、同宮所蔵の大概若経の奥書に「奥州人」とみえ、いずれも書写に関わった勸進聖ということである。さらに、下巻末に別筆で記された嘉慶三年(一三八九)の奥書の「別峰叟」が、無本覚心と関係のある東福寺派の僧・別峰大殊であることを明らかにしており、この史料と野上八幡宮への信仰の広がりを一層確認できる。

最後の「小川八幡神社所蔵大概若経について」(藺田香融)は、一九七八年に藺田氏が確認(発見)して以来、様々な意味で注目を集めた資料を初めて本格的に発表するもので、すでに藺田氏の速報(和歌山県小川旧庄五区共同保管大概若経について)、『古代史の研究』創刊号、一九七八年)がなされ、また『野上町誌』下巻(一九八五年、文化財編、羯磨正信氏執筆)には一部が写真付きで紹介・検討されていたものの、個人的にも長らく公刊をまちわびていた正式の報告である。本論には、冒頭に本経が奈良時代の経巻を多く含む、和歌山県内でも数少ない貴重な資料であるにもかかわらず、不幸にも所有権をめぐる裁判の俎上に上がった経緯が詳細に記されており、裁判を含めて長く関与されてきた研究者としての責任を果たされている。また、保存状況にも言及され、今後の保存活用について提言がなされて

いる。さて、この大般若経に関する調査報告は、単なる奥書だけの調査だけでなく、現在の調査水準に則り、各巻ごとの詳細な分量が測定されている。また、経文以外の文字情報はすべて書き上げられ、それは経櫃の墨書にも及んでおり本格的である。ただし、伝来状況を判断するための修補情報、とくに修補がどの時期のものが全て明らかにされているわけではない。

さて、本経の成立についても検討がなされており、県内でも他には見られないほど複雑な構成になっていることが確認できる。その中でも天平一三〇一四年の御毛寺（『日本霊異記』下巻第一七緑の「弥気の山室堂」か）知識経を中心とした奈良時代写経（二二〇巻）・平安時代の一日堂経（二三九巻）・南北朝時代写経（五九巻）という多くの巻数があるグループについての検討は詳細である。すなわち、元弘三年（一二三三）以後正平十八年（一二六三）以前に小川庄に中核となる部分が施入され、正平十八年に一〇〇巻以上が高野山大楽院から補充、そして弘和二年（一三八二）以降五〇巻程度が補写されたという。これらの分析については、とくに大きな異論はないが、それ以外に含まれる経巻や修補の状況については、さらに検討すべき点がのこされているものと思われる。また、大楽院などが経巻の売買・交換などを幹旋する聖教流通センターの役割を果たしたと位置づけているが、筆者も別の経巻で同様の存在を指摘したことがあり（拙稿「紀の川市下鞆瀬・大善寺所蔵の大般若経について」（『和歌山県立博物館研究紀要』一二、二〇〇六年）、「中世の根来寺に関わる大般若経について」（『中世根来の社会史』和歌山大学教育学部海津一朗研究室、二〇〇八年）、このような存在をさらに浮かび上がらせるための作業が必

要であろう。本経が根来寺西方院において文明四年（一四七二）に修補がなされているという点も、その背後関係などに注意しておくべきであろう。

なお、和歌山県下の大般若経について、五来重氏の医王寺経の調査があり、「それ以外については、本格的な調査は行われておらず」というのは、おそらく本経の「発見」当時の状況で、現在のところ、土井通弘氏による那智勝浦町楞嚴院経の調査（土井通弘「和歌山県那智勝浦町楞嚴院所蔵崇永版大般若経について」（『滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要』五、一九八七年）や、元興寺文化財研究所による有田郡有田川町（旧清水町）の東大谷・日物川・二川の三地区に分有されている大般若経（県指定文化財）の調査（稲城信子「神仏習合史料としての大般若経」（『中世村落寺社の研究調査報告書』元興寺文化財研究所、一九八九年）などを嚆矢として、いくつかの本格的な調査がなされている点は指摘しておきたい。また、現在に至るまで、和歌山県立博物館では、長保寺経（海南市）・相賀八幡神社経（橋本市）・萩原自治区経（かつらぎ町）・龍谷寺経（かつらぎ町）・大善寺経（紀の川市）・地藏寺経（かつらぎ町）に関する調査報告を、『和歌山県立博物館研究紀要』誌や特別展図録などで行っている。

四

本書の意義は、紀伊半島における高野山や熊野三山といった伝統的な宗教勢力の範囲の中に、中世後期以降、新興宗教勢力が入り込んでゆき、複雑な様相を呈するようになったことを特定の史料群によって

明らかにしたことにある。このような重要な史料群は、和歌山県内では自治体史などにより一定程度明らかになっているが、未調査のまま残されているものも多く、本書のような調査報告が今後とも必要な状況である。さらに、地域の過疎化も深刻であり、市町村合併により広域化した自治体の文化財把握や保存は厳しい実態であろう。このような中で、本書は文化財の調査・保存に携わっている関係者を含め、多くの住民が手に取ることが望まれる。

以上、雑駁な評となり、誤解も多いことと思われるが、編者・著者をはじめとして読者にもご海容を願うこととして、このあたりで擱筆したい。なお、すでに佐藤健太郎「書評『南紀寺社史料』」（『熊野歴史研究』一七、二〇一〇年）が発表されているので、こちらもあわせてご参照いただけると幸いである。

（和歌山県立博物館）